

## 英語教育の到達目標をとらえるためのEnglish Curriculum Framework

### - 一貫した英語コミュニケーション能力と発達の観点 -

## English Curriculum Framework for Identifying Stage-specific Attainable Goals in English teaching and learning

### - Communicative English Competence and Spiral Communication Progress -

田中茂範(慶應大学)、吉田研作(上智大学)、

加藤由美子(ベネッセARCLE<Action Research Center for Language Education>)

英語教育において、幼児から大人までの一貫した到達目標を設定するには、包括的なEnglish Curriculum Framework(ECF)の開発が求められる。ここでいうECFは、英語教育における哲学であり、行動計画を立てる際の指針であり、教育方法論であり、評価論であり、学習論である。我々は、ベネッセコーポレーションの主催するARCLE(Action Research Center of Language Education)に於いて、ECFの開発を行ってきた。この発表では、ECFの中心の部分となる英語能力の捉え方に関する議論に焦点を当ててみたい。

議論のポイントは3点ある。第一に、従来は、コミュニケーション能力というものを言語能力、語用論的能力、社会言語学的能力などの集合としてとらえ、個別能力の細分化をはかるというやり方で定義してきたが、それだと全体が構成要素のリストで終わってしまう。そこで、我々は、英語を実践的に使用するという行為の平面と、行為を可能にする知識の平面の相互作用の中でコミュニケーション能力をダイナミックに捉えるという提案を行う。第二に、これまで、運用能力の評価においては4技能別評価、すなわち、speaking、listening、writing、readingの4技能を個別に扱うというのが一般的であった。我々は、従来型の評価方法の問題を批判的に乗り越え、language resources と task handling の新たな概念化を試み、これまでの4技能をtask handling のための communication skills という範疇の中で再定義する。そして、第三に、言語発達を spiral communication progressとしてとらえ、発達の視点を取り入れ、なおかつ共通の基準で言語運用能力をとらえるといったこれまでにないモデルを提起する。

少し具体的に言うと、現行の communicative competence 論では、理念としての能力を措定し、その構成要素をこれまた抽象的な概念で説明するというところに問題がある。一般的な定義としては、「当該言語を異文化のコンテキストで適切にかつ自然に使う能力」と記述されるだろうし、この定義自体は受容可能なものである。しかし、この一般的な記述をさらに詳細にすることを目的に、「communicative competence はlinguistic competence、pragmatic competence、sociolinguistic competence、non-linguistic competence などから構成される」といった具合に構成要素を示し、個々の要素について説明するというのが常である。しかし、ここで、「言語使用のコンテキストの捨象」という問題が出てくる。「当該言語を異文化のコンテキストで適切かつ自然に使う能力」という上記の定義文の「異文化のコンテキスト」という重要な部分が考慮されない結果に終わるという問題である。しかも、各構成素が何であるかの説明に関心が置かれるため、構成素の有機的な連関としての communicative competence というものが姿を見せないということになる。たとえばlinguistic competence の要素として grammatical competence が要素としては含まれるが、communicative competence に接続する grammatical competence とはどのようなものであるか、ということについては明確な規定が行われない、といった具合に、である。これは、「構成素の相互連関の欠如」という問題である。

我々は、communicative competence を定義するに際して、実際に英語を使用するというコンテキストに注目し、言語運用と言語知識の相互作用を重視する。また、英語使用の「コンテキスト」を communicative competence の定義の構成概念とするためには、「多様性の中での共生」あるいは「多文化を生きる」という視点が重要であると考え。ここでいう「文化」は、これまでの議論で見られるそこにある「対象としての文化」ではなく「直面する文化」でなければならない。「多文化を生きる」という視点を採用すると、多様性との直面、異なったものにどう向き合うかが重要になってくる。ここで、我々は、「共感」と「共生」の概念に注目する。共感とは、相手の立場・考え方の違いを超えて了解し、時には違いを自らの意味空間を改変する契機するという「しなやかさ」を表す概念である。一方、共生とは、価値観の違った者同士が切磋琢磨しながら、多様性の中で生きていく、「たくましさ」を要求する概念である。

こうした前提の下、英語運用能力をtask handling とlanguage resourcesの相互運動としてダイナミックに捉える。これまでspeaking, writing, reading, listening という4技能と呼ばれていたものを"task"という概念で捉えなおし、どのようなタスクをどれだけ機能的にハンドリングできるか、ということに着眼する。また、語彙、文法、機能表現、慣用表現などは language resources として捉えなおす。すると、個人が関わる世界は、タスクの集合とそれを実行するlanguage resources の複合として規定することができる。すなわち、「どのようなタスクをどのような言語で行うか」という問いに注目するということである。小学生が家賃の交渉をすることはまれだろうし、I'd appreciate it if you could ... などといった表現を使えば、奇異に思われるだろう。

発達段階をspiral communication progress という視点でとらえ、それぞれのstageをtask と language resources の観点から記述し、それをcontent syllabi としてデータベース化すれば、発達段階に応じた到達目標が議論可能となるはずである。

この発表では、ECFの理論的な特徴、タスクの概念規定、language resources の中身、発達の観点と到達目標などについて、許される時間内でできるだけ全体像と具体像がつながるように心がけたい。

Shigenori TANAKA <stanaka@sfc.keio.ac.jp>